

[講演要旨] 姉川地震の震災写真を使った展示による防災アピール

里口保文(琵琶湖博物館)・小松原琢(産業技術総合研究所)

Education of disaster prevention by a exhibition using photographs which are pictured scene of disaster on the Anegawa Earthquake

Satoguchi, Y. and Komatsubara, T.

§1. はじめに

地震などの自然災害が多発する日本において生活をする限りは、そういった災害を起こす自然現象についての知識が必要であろう。しかしながら、普及や教育の現状はそういった望ましい状況にはない。たとえば、田村・他(2006)が指摘しているように、東京都の高等学校における理科の地学担当教員は、高等学校288校あるなかで67名しかいない。これは割合でいえば4校に1人しかいないという事になる。すべての学校にはいないという状況では、当然ながら開講されない学校の割合が多いはずである。義務教育である中学校では、それぞれの分野をまんべんなく教える前提があるが、伝聞で知る限りでは、必ずしもそうになっていないようである。小学校においては、分野別教員ではなく、教育系大学での初等教育分野を履修した学生であり、文系学生が多いために理科全般から逃げ腰であるという面もある(中井・他, 2006)。このような状況の中であっても、より広く一般の人に、また、地学を学校で習わないという人びとのために、災害を起こす自然現象や、災害にたいする備えについて知らせていく必要がある。そのような場の重要な一つとして、博物館やその相当施設があるだろう。博物館では、自然科学系ではそのメカニズムを中心にして、また、人文系では、災害やその歴史に中心をおいた形式で展示される事が多いようである。

§2. 災害の展示は単一の博物館だけでは難しい

自然災害についての知識としては、様々な知識が要求され、多くの情報を知っている方がより良いが、限定的にでも人びとが知っておいた方がいい知識とは、その災害を起こす自然現象が起きたときにどのように対応するのか? また、それが起きる兆候を知ることで、それに備えられる・危険回避をできるという事であろう。そのためにも、その現象がおきるメカニズムはベースとして知っておく必要があり、現象によってどういう災害に結びつくか、それへの対策はどうか? といった、自然科学や人文科学双方の情報が必要である。そのためには、専門分野が限定された学芸員個人の力量で不完全な情報を提示するのではなく、様々な研究者や団体が共同で展示を制作する事も重要であろう。

§3. 何をみせるか

災害は、それがどのようにして起きるかを言葉で説明するよりも、どのように被害を受けたかという過去の事例を映像として見せることが伝わりやすい。しかし、被害にあった人にとってはそれがつらい思い出であるため、その映像からは恐怖や悲しみを感じるものという側面を持っている。近い時代の記憶や記録を風化させないという事も大事ではあるが、自然災害を冷静な目で伝えるには、自分たちに近いものでありながらも、やや離れて見られるような映像を使用する事も一つの方法であると思われる。また、単に恐怖心を植え付けるのではなく、自然に起こる現象によってうける恩恵を知り、なくすことのできない現象とどのようにつきあうかを知って

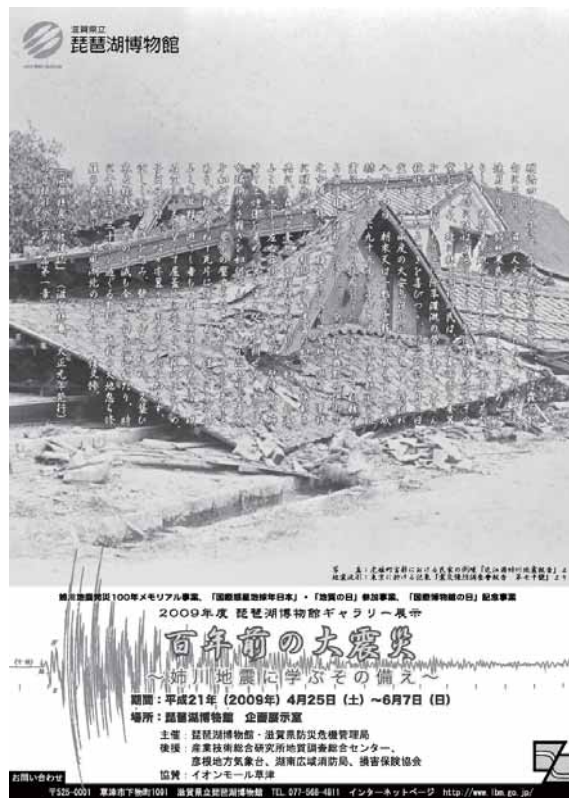


図1 展示会のチラシ

もらう事も重要であると思われる。以上のような考えから、姉川地震（1909年8月14日午後3時31分）から百年の本年に姉川地震による災害写真を中心として、地震のメカニズムや防災を含めた展示会を行った。

§4. 姉川地震を振り返る展示

姉川地震は、1909年に湖北地域の特に姉川下流域に大きな被害をもたらした地震であり（今村、1910）、滋賀県を震源とする最も新しい地震でもある。この当時の記録は、今村（1910）や彦根測候所（1911）などの調査記録と、災害状況を撮影した写真が残っており、それらからどのような地震であったのかを知ることができる。当時の被災者は既に他界されており、当時の記憶はその地域の人々であっても伝聞のみである。しかしながら、身近でおこった災害の記録である事から、全くの他人事でもないという効果が期待される。ただし、時間的距離感がある事は、観覧者にとっては



図2 展示室の様子。防災商品の展示コーナー。

『昔の事』で終わるといいう危険性も考えられるため、過去を振り返る事を中心におきながら、これからの地震や防災について解説するという企画を検討した。

この企画では、当初から博物館だけで検討するのではなく、行政と研究者との共同で行うことを考えた。滋賀県には、主に西部や北部に大きな活断層があることから、教育・普及を含めた地震防災についての対策が求められており、姉川地震から100年目はそのようなアピールをするよい機会である。そのため、展示企画に行政（滋賀県防災危機管理局）が参加しやすい状況があった。また、前述の通り専門的な内容を含めるために、地震やそれに関する分野の研究者（産業技術総合研究所の研究者）に協力を得た。これにより、展示は、過去の災害とこれからの防災をつなぐ展示として考え、(1)姉川地震を振り返る、(2)地震を科学的に知る、(3)防災へのとりくみ、という3コーナーで構成した。また、展示がパネル中心である事から、来館者数の見込みも低めに考えられる事から、県内各地で行う事も企画し、1年間は県内のいくつかの場所でこのような展示が見られる、という事で企画をすすめた。

結果としては、展示を見た人の数はおよそ1万人と推定され（入館者数の約20%）、県内の各地を回る事を考えれば、2万人程度には知らせることができると予想している。しかしながらこの人数は、地震について知ってもらうための数字としては全く不十分であり、地震について、また防災についての関心をもってもらうという目的にとっては、このような企画が単発で終了させてはいけない事を物語っている。そのためには、博物館だけで企画するのではなく、専門分野の研究者が積極的に博物館等に関わって、展示などによる社会へのアピールを行う事を期待したい。

文 献

滋賀県彦根測候所, 1911, 近江國姉川地震報告, 94pp.

中井睦美・阿部国広, 2006, 教員養成問題および小学校教育の現状—特に地学教育の観点から—, 日本地質学会 第113年学術大会講演要旨, 37.

今村明恒, 1910, 明治四十二年姉川地震調査報告, 震災豫防調査會報告, 70, 1-63.

田村糸子・三次徳二・浅野俊雄, 2006, 中学校・高等学校 地学教育の現状と問題点, 日本地質学会第113年学術大会講演要旨, 38.